

待59

943



尹賀の上野仇討全

金壽堂版
國政筆

彩の井桁家の
の溝中を渡
返靴負と云
ふ者あり録
千石を領
惣領の女子
みて荒木
右衛門方
へ嫁し二
男の數馬
とて近習
役を勤む
又同家中
み河合又左
衛門とて別
んこんるの者



河合又五郎

尹
原
我





ありあ
み又左
へ門臨
終の際
鞆負ふ遺言
して悴又郎の
事を頼み家重

又五郎

代の正宗の
渡辺を譲
んと言け
るを鞆負
之を受
入用の節
御所望
申へ又五
郎との妻
心得申
りて立啼
りしがその
跡みく
泉下の客
とあり



はより又五郎
父の遺跡を受
つる近習役を勤む
る小程なく遊里の
み遊びる故鞆負
に見さふ忍びず

渡辺鞆負

意見ききしりれ又五郎の者を言ひし鞆負
よ切付しり渡辺心得しりと二刀引抜く其心
はみあざらへ掛てとるなり急所のいづくに二言
いざ息つくり又五郎其俵刀の血汐をぬぐ
つ鞆負納めて其場を立ちりつて狼意の阿部
城五郎屋敷に至り面會して鞆負の武士道の意恨みより同
家中の渡辺鞆負を討てしやあり何卒あつくはし下まはと頼
るみ城五郎打聞て傍輩を討て立のくと珍しういふものへまひ申
まへと幸ひ今日同列も居り合まきまが對面あつて然るべりと同道あして

伊勢越



坐敷へ至り右の
よりを語りけ
き座の人々
兼引さし直様廻
文を以てふまほ
み御旗下
九十三人阿
部の屋敷
合合合
井桁家
より所
々掛
合合
及ふ
と虽

又五郎の渡さば此上の人敷を
差向け弓矢を以て受取んと
既天下の騒動とも成べき所
井桁宮内少輔殿急病にて果
と静

阿部城五郎



さても
渡辺敷馬
横死ふ仰
天さし其歎
大方おふにま
ふ姉智荒木方
らせらる仕官の
故江戸へ下るこ能
によて門弟北藤武
右衛門を下り万端心
へささるも又敷馬の上
願書を出しほみ殊の外御賞
美あり願の通り仰せつけられ
銀五十枚と國之の刀を拜領
りれは有るくお受申し直様發足

又五郎

尹貫茂



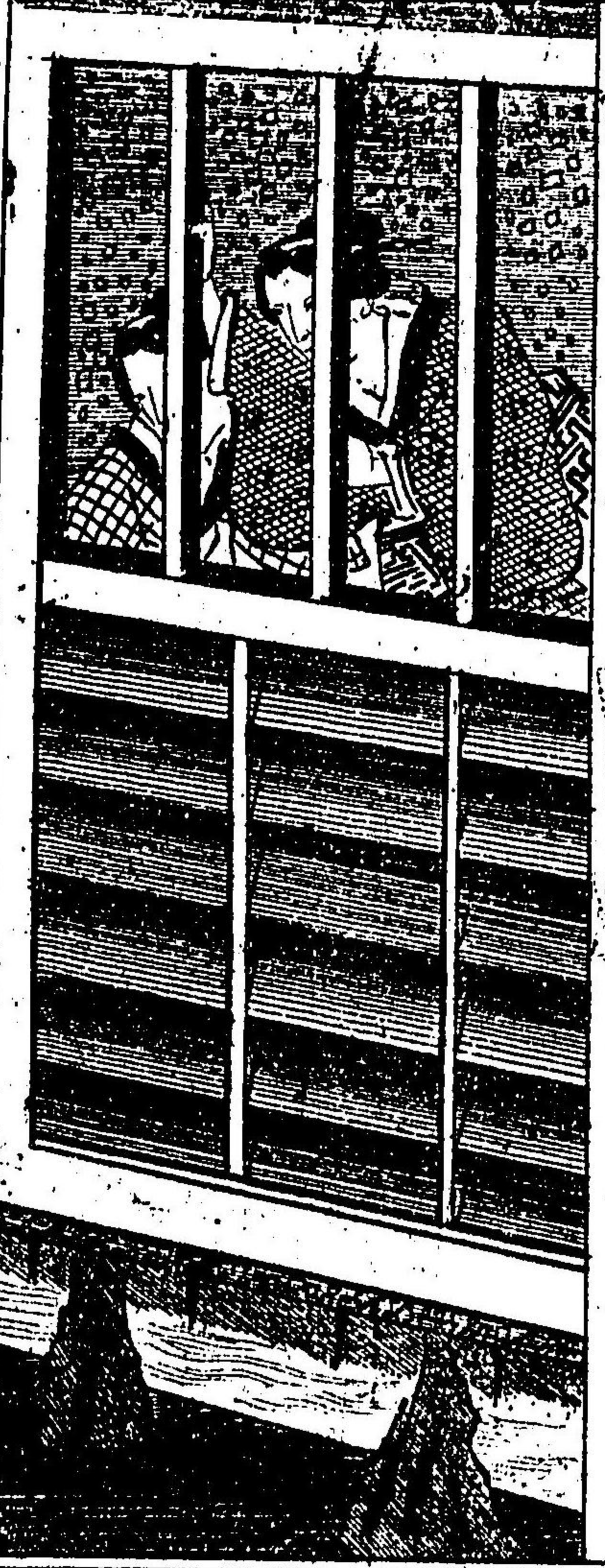
北藤武右工門と
もふ大和國郡山に
あり荒木又右門
對面あり助太刀
このころ素より舅の
敵を討つ心よく受ひ
まゝに當りて武藝を
留めて武藝をま
みはへて北藤武
右門山添
伊兵衛の兩
人を相手
あし日々
いことを
しるに

今いとて又右工門
いとほの願を出し北藤
山添を召つれ數馬
ろとも出立あり
爰ふ又荒木が同藩
櫻井甚左工門同其内
と云兄弟あり
とれ河合又
五郎の伯父
りれば又五
郎ふ力を添へ
んと是も同
くいとほをね
ぐひ兄弟もろ
とも郡山を發



弁術家
使者

作賀越



足ノ江戸へ下り阿部城五郎の屋敷
ふいさりたる。〇さても河合又五郎
阿部城五郎を初め旗本中の助力
ふより肥前相良へ落行途中見送り
として櫻井兄弟を始として竹内
丹高木清兵衛宇佐見五右衛門
屋合殿四郎八十島嘉右衛門

長谷部九兵衛
衛川角源六
溝口源左工
門松波金四
郎田村半平
高坂庄五郎
金子佐四郎
岩井金平風
間重左工門
関口政五郎
是ふと先と
お一流を極
めたる人々
の其外小具



丹
戸
越

て吉三あ出江そ六上りいを重ぶ
 人田州州あ出江そ六上りいを重ぶ
 散がの州州あ出江そ六上りいを重ぶ



伊賀越

六



舟走

とそろへ東海道のりけさく
らいでい甚る
左エ門
ガ病氣



伊
員
哉

七

作
進
走



伊賀越



伊賀越

伊賀越

其まゝ嚴重命
 こめの義を命
 せられぬれ荒木
 有るべくお礼申
 上旅宿へ立歸
 りつ馬むの北
 藤山添へ右の
 より申きけ支の
 くさあして待ま
 たり時寛永十
 一年十月朔旦河
 合又五郎を始め
 三十六人のめく
 真先ふ楊井兄
 弟と初と一攻
 弟くみ行列を



伊賀の城
 下へ乗り
 込み來り
 小田町の
 四辻を左
 りへ曲る
 処を待まけ
 る四人の者
 一度小愛
 へき入出中
 音の馬大
 五郎先年汝
 為の討たる
 時を待たし
 外待受り

尋常ふ勝負
 せよと身が
 まへへりあ
 ふ木も共ふ
 声をうけ勝
 負くと呼を
 るふそおも
 ひがけおも
 とあれを皆
 く臆して見
 へるる中お
 も櫻井兄弟
 大音ふ呼
 かくるやう敵
 いろづう四人



丹
 賀
 越

伊賀越



+

伊賀走



せむしあし

進め
て討つは
とぞま
右門

山添伊五郎

敷馬



鎧あつとり馬より下ん
あす又右工門の飛鳥
のどくく馳よつて右の足
を打落す弟甚助これを見
ま兄の敵のがきどと半
弓み矢きつらん切
をあさ
とあす
処き又
右工門
飛鳥
て小手
を切る
こい



馬より
飛鳥
討て
るを身
をわ
細首
てうと
討落す
其ひま
ふ又五
郎馬よ
り飛下
り鎧取
りのべ
數馬を
目がけ

突て
り双方
が戦
が馬が死ぶ
の切先ふあいら
ねて小田町乃坂
下さしてありぞくさの
さりと追てゆくね又五
郎ふ附添来り一釵道師又
五郎を討せと援つきて
切てうる又右工門ハ存へ
て左右ふ刀を打ふつてあ
るを幸ひ切へおすついで北藤
山添もふ入く多勢をいいて
ふ戦ふり元來荒木が高弟あれが



矢庭ふ
四五人
切て落
す又右
工門ハ

敷馬



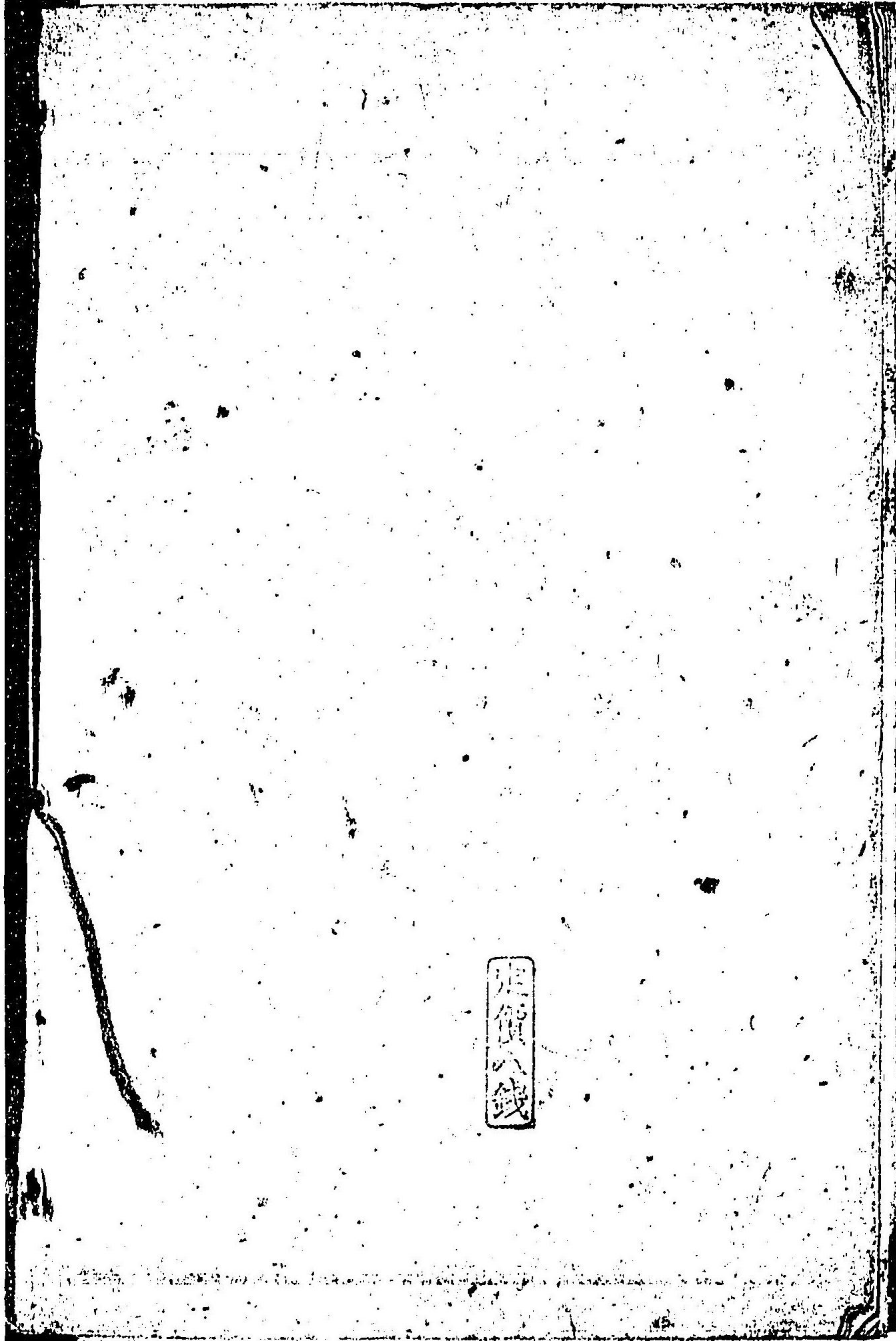
川角宇佐見を切伏せられハ
山室長谷部左右より
つてつり向ふよリ
ハ星合う長
刀を以て
切くる
されども
あふ木ハ
と共せハ皆
盡く切伏せり
其ひまみ敷馬又
五郎と名づく戦又
郎が突出す鎧を切落
半さるゝ処さふみこてつひ
本望達しり

又五郎

明治八年八月廿日御届 編輯兼出版人

浅草區南元十二番地

英中家 牧 金之助



定價
八錢